

鈴鹿高女の思い出

龜山町立鶴鳴女学校を前身とする鈴鹿郡立鈴鹿高等女学校は、昭和十六年六月三十周年を迎えて、記念事業も計画されています。校史編纂の事業も始められ、お二人と卒業生お二人に思い出を綴っていただきまし

近況と回顧

芳子母

長い教育関係の仕事を
四十年)町内の皆様に
お世話になつたので、その
うえ思つて、自分なり
はつぱつとしている。納税組合
一人ラブ、氏子継代、

文化講習会、文化保存会等、それから懇親会、団体懇親会等、そこで多くて、困った困った。自分でも、ながらは自分で楽しくて、思って居ながらも、遂々甘える事が多く、酒を嗜む事なども昔と大差なく、そして短い時間で失敗の連続である。思慮も行動も老化的進歩である。これが、自分の自由な時を考える時がある。心地悪くはない。しかし、いつかが

ほし。心のままに振
てみたい、と云いながら
もそれと、これは大発見
をたどりつつも、只今健在
である私の近況、賢明なる
そのかえの生徒諸君に御報

「おはよう、只今健康である。」 告いたします。

のほどお喜び申しあげます。導意欲に満ちた教職員各位、ここに学ぶ生徒諸君

日頃は母校ならびに丘友会（龜高・鈴鹿高女同）の明るい態度など、今更ながら母校の発展充実の

（会員）発展のため格別のご支援と、ご協力を賜わります。

の総会が近づき、会報発行の問題が議題に上ります。そこで、この問題をめぐる諸々の問題を、この機会にあげます。

丘友会の発展を願つて
つのは早い
もので、今
丘友会々長 森

等女学校が設立されて六年後、龜山高等学校が発足、年に一回の会報でありました。

してから三十二年になつたが、これを見ていた
たり本会も、今年の新会員を迎えて、一万五千数
人を去つたなつかしい高校時

百名に達し、市内、県内代の学窓を、また学友を
は言うに及ばず全国各地想い浮かべていただけた

で活躍されていられるることはまことにうれしい限りであります。一方、目的は、会則にもありますように、母校の発展を

卷之三

昭和四年四月五日、校内に学校が創立されてから、年度毎に山高校の主催で、まつた、鈴鹿高女の旧師

私は昭和三年四月に前
鈴鹿高等女学校に初めて
京の学校を出て教師として
の第一歩をふみ出したも
のです。もう五十数年と昔
のことと、今、鶴高の先生が
でも大部分はまだ生まれ
もいられなかった昔々の事
とです。今の校長小林先生
はまだ三才の可愛らしい人
つっこい坊ちゃんらしい人
こんな古い私だ、先日お
話で私をして最初の担任教
師たる鈴鹿幸子先生が何が
けとおっしゃつて下さつた
ので、少しばかり思い出
た。私が「絆の葉をなぐた
と云う謡があるが、まさに
その通り、わーとぼか
一方に泣き出したのである。
予期しない反撃、隨
何をしているのか、とそ
と穏やかな先生が顎を細
から戦争も酷くなりつ
あつた、昭和十七年の三月
亀山とお別れして郷土十
亀山の女学校に転任した。こ
十二年間、私は亀山で鈴
鈴の腰折歌を二三首介
た。だが、「絆の葉をなぐた
と云う謡があるが、まさに
その通り、わーとぼか
一方に泣き出したのである。
予期しない反撃、隨
何をしているのか、とそ
と穏やかな先生が顎を細
から戦争も酷くなりつ
あつた、昭和十七年の三月
亀山とお別れして郷土十
亀山の女学校に転任した。こ
十二年間、私は亀山で鈴

創立当時の三重県鈴鹿高等女学校全景

校
佐々木信綱 作詞
片山顯太郎 作曲
(昭和6月制定)
福岡りと
——額広く
さう共に
清く流る
つどひ学ぶ
すすみ行かむ
高くそびゆ
伊勢の處女
怨となして
かがむ絶えず
家の為に
いざ共に
たが、
最年長
私たちは
は毎週
た。
た。
たが、
中で立往生。生徒
崎さん)の助けで
しました。
教えることより
ることの多い
た。何でもやつて
全校生の血液型を
した。他の先生
まつさせて下さ
ました。
満五年過した今
の春、鈴鹿高女と
が合併したため、
することになり
ど位立たか今
も純真だったとな
思いました。(先生
シロバ
市五丁一三 鈴鹿
町一一一です)

「…………」これ四十年位前
神戸小篆事研
乗物がなく
るには驚き
ましたよ」と
から約三千
一時ござい
ました。鉄道駅へつき
先生は毛糸を
せと織物を始め
ので「何をあま
とおきまします
なりますよ」と
て、汽車の
つせと手を動か
み乍ら「あなた
できたらきっと
のものだまとめ
の車で、さう思つて」と目を
さがす。「…………」
先生は福岡先生
いわれますと
ものだ」と、お
時代には、お
ですやすやと眠
の足下へも届か
し合つた事もご
無難でございま
す。